

木と子どもと遊び

田中 千尋

はじめに

小さな子どもは木が好きです。何もない広場でも木が一本あれば、いつの間にか遊びが生まれます。夏は木陰をつくり、雨の日は屋根になります。秋には葉っぱや実を落とす木もあります。木は子どもたちにとって遊びのきっかけをつくる天才です。また、子どもたちも、何でもない木から遊びを考え出す天才です。遊びとは子どもたちにとって生活その

ものであり、友だち作りの機会であり、コミュニケーションの重要な手段です。

私は昨年の四月から、たびたびお茶の水女子大学附属幼稚園を訪れて、子どもたちの遊びの様子を観察してもらっています。特に自然物（木、草、虫、石や砂など）を仲立ちとした人間関係の形成という観点で、子どもたちを観察してきました。興味深い行動が多く見られたのですが、今回はその中でも、一本の木を中心にした人間関係について、少し

書いてみたいと思います。

スズカケの太木と子どもたち

私は小石川植物園の森に、よく子どもたちを連れていきます。あそこには大きなスズカケの木があります。スズカケの木というのは、東京の街路樹によく見られる、あのプラタナスの木と同じです（街路樹にプラタナスがよく植えられるのは、空気の浄化



絵・田中 千尋

力が強いからだそうです）。子どもたちはあのすべすべした樹皮の、大きな木が大好きです。中には、子ども五人で手をつないでも届かない胴回りの、大きな大きな木もあります。

どの学年の子どもでも、その周りで一時間でも二時間でも半日でも、飽きもせずに遊んでいます。その中に一本、どういうわけかちよつと斜めに立っている木があつて、不思議なことにその木が子どもたちには一番人気があります。その木の周りに集まつては散つていきます。斜めになつているので、がんばれば登れそうな感じに見えるのでしょう。しかし所詮登れるわけはなく、ちよつとよじ登つてあきらめてしまいます。その木に近づいてみると、根元の樹皮が剥がれて、ツルツルになつています。きつとたくさんの子が登ろうとしたのでしょうか。

大きな幹なのでかくれんぼもできるし、「だるまさんがころんだ」の鬼の木にもなり、自然と子ども

たち同士遊びの輪ができます。秋には「スズカケ（鈴掛け）」の名の通り大きな立派な実をつけます。この実は直径が三、四センチもあり立派ですが、種子と綿毛がびっしり集まったものです。割ろうとすると、ちょうどガマの穂のように爆発して、体積が十倍にもなります。これが子どもたちには愉快でないのです。しかしどういふわけか、この実は晩秋になつても枝にがんばり、なかなか地面に落ちません。完全な球果はめつたにないので、最初に拾つた子はもう英雄です。たちまちその子を中心に輪ができます。

どの例を見ても、一本の木が子どもたち同士の間関係の形成に一役買っていることがわかります。

園庭の自然環境

附属幼稚園の庭はいつも美しく整っています。よく作られたというよりも、子どもたちの活動を考え

てよく考えられた自然環境を持つ園庭だと思えます。ここにもたくさん木があつて、それぞれの木がその特徴によつて、子どもたちの活動を支えています。三歳児の保育室の前にある木には、よく耳をつけている子がいます。ぬいぐるみをおんぶした女の子に「何が聞こえますか？」と聞いたら、「何も聞こえないよ」といって、また耳をつけています。山の上のイチヨウの大木の根元を、三人の男の子が木の棒でしきりに掘っています。「何の穴ですか？」と聞いたら、「○○くんが根についたドングリに虫がいるって言つたの（意味不明）」と返ってきました。

さて、五歳児の保育室の前に一本の木があります。それほど高くもまた形のいい木でもありませんが、この木は子どもたちにとって非常に特別な存在です。枝の高さや間隔が良く、小さな体の子どもたちが木登りをするのに絶妙な枝振りなので

す。無論、こんな都合のいい木が自然にできたのではなく、子どもたちが登れるように、上手に剪定してあるのです。私はこの木を中心にした子どもたちの行動に興味を持ち、何度か観察する機会を持つことができました。

木登りの師弟関係

最初に私が観察したのは九月下旬、夏の終わりの頃でした。天気もよく、残暑も一段落していたので、ほとんどの子は半袖にエプロン姿で、園庭で遊んでいます。その中に五歳児の女の子が二人、木登りを始めました。この木は、最初の足場になる枝が子どもにとっては微妙に高く、登り始めるのに少々勇気と決断がいるようです。

ひとりの子（A子）はかなり慣れてい



るらしく、足場の選び方が確実で、ホイホイホイと登っていきます。もう一人の子（B子）はまだ「初心者」で、最初の一步に難渋しています。それを見ていたA子は一旦地面に降りて「指導」を始めました。最初の一步を手伝ってあげたり、「その枝に足をのせて」とか「葉っぱじゃなくてちゃんと枝をつ

かんで」という具合にアドバイスを与えています。この状況では一つの動作に対する技量の差がはっきりしているのです、一時的に師弟関係が発生しています。この状況は二十分ほど続きましたが、ついにB子は最初から自力で、三番目の枝まで登れるようになります。この時点で師弟関係は解消され、同等の立場で木登りができます。ただ、B子にとっては「A子が木登りを教えてくれた」という思いが残り、A子にとっては「私がB子に登り方を教えた」という満足感が残るでしょう。これは木が育んだ人間関係と言えると思います。

その日、この二人は一旦木登りをやめてしまったのですが、しばらくして木登りを教わっていたほうのB子が別の子を連れてきて、今度は自分が教える役にまわっています。新しい師弟関係の発生です。後日、A子にインタビューしたところ、実はA子自身も年中（四歳）の頃から別の子に木登りを教えて

もらったことがあるという話でした。こうして一本の木を仲立ちに、次々と新しい人間関係が生まれていくのです。

木の上に人がいる

二回目に観察したのは、十月中旬の秋の始めでした。「木登りの木」は常緑樹なので、秋になっても紅葉や落葉はありません。つまり、この木の周囲では一年中同じ環境で遊べるということです。この日は、観察者にとっては不可解な行動が見られました。

木の上や周りで遊んでいたのは、年長五人の女の子と年中二人の男の子です。男の子と女の子は一緒に遊んでいたのではなく、独自のグループだったようです。男の子二人は木に登ろうとする仕草はしきりに見せていましたが、木の下でピョンピョン跳びはねるだけで、結局登ろうとはしませんでした。奇



妙だったのは女の子のグルーブの行動です。

このグルーブの子はどの子も木登りに慣れていました。入れ替わり立ち替わり木に登っては降りていきます。最高で三人の子が同時に登っていましたが、木のとっぺん（といっても三番目か四番目の枝が実質的な終点）まで行くと、更に上に顔を向けて何か叫んでいます。さりげなく近づいて聞くと、「おい、その人——！」とか、「おばあちゃ——ん！」とか、「降りてきて——！」と言っています。叫ばずにブツブツ言う子もいるので、更に近づいて聞こうとすると、申し合わせたようにだまってしまします。木に向かつてしゃがんで、目を閉じて合掌している子もいます。この奇妙な行動のわけを知りたい、何人かの子に聞いたのですが、「だれもいないよ」「知らないよ」と黙秘権を行使します。どうも、この木にまつわる、子どもたち独自の「物語」のよくなものがあるようです。木登りを通じての一種の

「秘め事」を共有することで、独特の人間関係を作っているようです。

ビデオによる調査の失敗

三回目の観察をしたのは、十一月下旬の秋の終わりでした。この日は木のまわりで遊ぶ子どもたちの声と姿を記録しようと思い、高感度マイク付きのビデオカメラを用意していました。しかし、マイク感度が良すぎたのと、遊びの支障になることを恐れ、木から遠くの園舎の壁に設置したのが失敗でした。雑音がひどく、とてもプロトコルをとれる音質ではありませんでした。また映像のほうも、子どもの姿が小さ過ぎて、細かい動きが判読できず、何の意図を持った動作なのか不明でした。屋外で活動する子どもたちの会話を録音する為には、かなりの工夫が必要です。独立の電源を持ったトランスミッター付きの小型コンデンサーマイクと、FMラジオ

オ、それに録音装置を組み合わせる必要があります。です。

終わりに

今回の観察は、理論的な仮説に基づくものではなく、またしっかりした方法が確立したものでもありません。また観察人員や機材、観察日の設定も十分で、まずはそのあたりからしっかり計画する必要があります。一つわかったことは、一本の木がいろいろな子を集め、遊びを支え、即席のコミュニティを形成するのに非常に大きな役割を果たしているという事実です。幸いこの木は常緑樹なので、四季を通じて同じ環境での観察が可能です。今後幼稚園の先生方と連携をとりながら、更に研究を深めたいと思います。

(お茶の水女子大学附属小学校)